
かわいいひと

伊達倭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かわいいひと

【Zマーク】

Z9504B

【作者名】

伊達倭

【あらすじ】

ある日、校内きつての不良少女と噂の、不動マコに呼び出された主人公。怯えながらも、約束の体育館裏に赴くのだが……

朝、登校すると、僕の下駄箱に一通の手紙が入っていた。

さすではラブレターかと内心小躍りしながら開けると、そこには「今日の放課後、体育館裏で待つ」とだけ書きなぐられた一枚の白い紙が入っていた。綺麗な便箋とは裏腹の、戦慄させる一文である。

さらにあらうことか、御丁寧にも差出人の名前まで書かれていた。

不動マコ 昨今では珍しい、所謂一昔前のスケバンと言われるスタイルを地でいく女子だ。流行とは正反対のロングスカートと、腰まではあらうかという長い髪。いつも何かを睨んでいるかのよう、鋭い目。先生方も、怖くて中々注意できないと噂の、校内きてのアウトローとして名高い御方である。

そんな彼女がどうして僕にこんな物騒な手紙を寄越したのか。

格好が格好なので、見かけることはよくあるが、いくら記憶を掘り返しても、喋ったことはあるか、彼女に近づいたことさえない。無論、彼女のお仲間の連中と揉め事を起こしたとか、恨まれるようなことをしたとか、そういう事実も一切もない。下駄箱を間違えたのかとも思ったのだが、我が高校は律儀にも下駄箱には名前が書かれている。手紙の入っていた下駄箱にも楠木惣一郎と、しっかりと僕の名前が書かれていた。これで間違えるとしたら、彼女は字が読めないということになる。流石にそれはありえないだろう。逃げ出すと余計怖い思いをしそうなので、取り敢えず教室に行き、授業を受ける。もつとも、授業などろくに耳に届きはしない。一体、自分が何をやらかしてしまったのだろうと、そのことをずっと考えていた。

そしてそれは、昼休みまでずっと続く。

「楠木。どうしたんだ、食欲がないね」

一緒に弁当をつづいていた高木という友達が、あまり減つていな

い僕の弁当箱を覗いて、少し心配そうに喋りかけてきた。眼鏡をかけた、ひょろりと細長い、地味な男だが、人の心の機微にはけつこう敏感だったりする。

高木の隣で弁当をつついていた仁科という友達も「どうかしたのか」と尋ねてくる。仁科は僕や高木と違つて地味ではないが、お人好しで、多少口は悪いが、誰からも好感の持たれる素でいいヤツだ。

「顔色もよくない。気分でも悪いのかい？」

「いや、ちょっとと考え事を」

高木の質問に、はぐらかすように答えた。高木はふむ、と呟いて、僕の顔を真正面から見た。急に、全てを見透かされていくような気分になる。

「そういえば、朝から元気がなかつたね。相談に乗ろうか？」

どこか台詞がかつた口調で言つ。仁科も「俺らでよけりやな」と付け加えてくれる。どうしようかと迷つたが、このまま放課後を迎えるのも怖い。高木も仁科も信頼できる友達なので、腹を割つて全部喋ることにした。

「……………」といふわけ。恨みを買つても思えないし、どうしていいのか、全然わかんなくてさ」

これまでの経緯をかいづまんと説明する。一人見ると、高木は腕を組んで、仁科は頭をぽりぽりと搔いて神妙な顔をしている。

「ど、どうしたらいいかな？」

二人の様子が僕の不安を膨らませる。やはり、これは所謂「オトシマエ」とかいうものをつけるための呼び出しの手紙なのだろうか。「不動」マコ、か。あんまりいい噂は聞かないよな

仁科が追い討ちをかけるような一言を呴く。

「仁科。怖がらせてどうする。大体、噂なんて大抵尾ひれがつくものだ」

高木が苦笑して仁科を諭す。こいつとき、高木は弁舌になる。

「けどよ、実際先生とか、不動に注意とかしてねえし」

「そりゃしないだろうさ。校則ではスカートは膝下15cm以下と

定められてはいるだけで、それ以下は駄目とは一言も書かれていない。髪も染めてはいるわけではないからね。それに何より、別に誰に迷惑をかけているわけでもないだろ？ 授業をサボつたりしているわけでもないようだし

「それでも、あのカツコ、流石に普通は咎められるつて」

「まあ、普通ならね」

高木はそこで言葉を止めて、意味深に微笑んで仁科を見た。

「焦らすなって」

「はいはい。不動さんはね、成績がいいんだよ。少なくとも、僕達よりはるかに」

僕は、大体どの教科も平均点より多少上の、所謂褒められも責められもしない位置にある。それは高木や仁科も同じことで、教科の得意不得意こそあれど、似たようなものだ。

「生徒指導の先生がぼやいてたよ。成績がいいし、別に何かしていわわけでもない。服装も校則に反してはいない。これと黙つて、注意しなくていいのに、注意しないといけない気がするんだよな、つて」

高木が苦笑交じりに付け加えた。まあ、いくら校則を破つていなことはいえども、先生の注意しないといけないという気持ちは、わからなくもない。まあ、僕としては、不動さんの成績やら、先生の言動よりも、高木が何故そんなに詳しいのか、そっちのほうが疑問であるが。それは仁科も同じだったらしく、「なんでそんなこと知つてるんだ」と尋ねたら、高木は実にそっけなく、去年同じクラスだったから、と答えた。それだけでは説明のつかないところもあるのだが、仁科は納得したようだ。僕も敢えて深くは聞こいつとはしなかつた。

「それで結局、どうしたらいいんだろう？」

思い切り脱線して、いた話を元に戻す。高木は「そつだね」と前置きしてから、

「先生が口出しきれないのはさつきも言ったとおりの理由だけど、

彼女の噂はそれだけではないからなあ

「そういうや、腕っぷしは強いらしいな。並みの男より全然強いらしいぞ」

仁科の言葉に背筋が寒くなる。男より強いつことは、男と喧嘩でもしないとわからないのだ。いくら成績優秀、規則に忠実（かどうか、疑わしいが）だとしても、喧嘩しているのなら、やはり不良ではないだろうか。

「まあ、あれこれ考へても仕方ないよ。ただの悪戯かもしれないし。取り敢えず、行くしかないのだろう」

「そうだよな。それに、俺たちもこっそり近くに隠れとぐ。もし殴りかかってきたら、大声出せよ。加勢してやる」

「う、うん……そうだね」

まあ、どのみち行かないといけないと思つていたのだし、この二人が近くに居てくれるなら、多少は安心だ。ここまでくれば、もう何をしても同じだと自分に言い聞かせ、僕は止まつていた箸を動かし始めた。

午後の授業は、一応頭には入つた。まだまだ不安は消えないが、高木の言つたとおり、考へても仕方のことなのだ。できればただの悪戯でありますようにと祈りながら、妙に短く感じた本日の授業を終えた。

「それじゃあ、行つてくるよ」

「おう、俺達もすぐ行く。危ないと迷つたらちゃんと叫べよ」

「うん。そのときはようしく」

僕は仁科と高木をそれぞれちらりと見て教室を出た。

階段を降りて、一応靴を替えて。手紙にあつたとおりに体育館の裏に向かう。今まで一度も来たことのない場所だ。雑草が所々に生えているが、陰湿というイメージはない。けつこう広く、喧嘩には差支えがなさそうだ。

「……さて

朱に染まつた空を一瞥して、雑草を踏みしめて、歩を進める。今更ではあるけれど、緊張してきた。今まで聞いていた噂とは少し違うようだが、あのスケバンのよつなスタイルと射抜くような鋭い目の印象は薄れない。もしも本当にオトシマヒとやらをつかられるのであれば、並の男（もじくはそれ以下）である僕は手も足も出ないことだらう。

「……やだなあ

殴り合いの喧嘩なんて、生まれてこのかたしたことがない。ましてや相手は女の子である。勝つても負けても、世間の風は冷たいことだらう。もしも子分みたいのがこいつぱいくつこいていたら、仁科や高木が駆けつけてくれてもどうしようもないのではないのだろうか。彼らまで巻き添えにしてしまつのは、流石に申し訳ない。

やっぱり、帰ろうか。

心が揺らぎかけた、ちゅうどいのときだった。

「楠木

君」

「はいっ！？」

背中から声がした。ちょっと低めの、女の子の声が。弱氣になつていた心が上ずつた声で返事をさせた。

恐る恐る振り向くと、件の女子、不動マコがこっちに睨みをきかせて歩いてきていた。一步踏み出すたびに左右にたなびく、黒く長い髪。足首まではあるうかといつ長いスカート。僕と同じくらいはあるのではないかうか、すらりとした上背。教師さえも恐怖させるという、鋭い眼光。整っているが故に一層怖い表情。ドラマで見るならば、かつこいいとでも思ったのだろうが、その強烈とも形容できる眼差しの先が、紛れもない僕自身となれば話は別だ。

「来てくれて嬉しい

「は、はあ

ぼそりと呟かれた言葉は、額面どおり受け取るなら、歓迎の挨拶だった。しかし、どう考へても睨まれているし、喜んでいるように見えない。それとも、オトシマヒをつけることが出来て嬉しい、

ということなのだろうか。それはあまりにもいただけない。

不動マコはさらに踏み出し、とうとう僕との距離は3メートルといつところまでに迫った。射程範囲内である。

「まあ、まあ、大体用件はわかつているだろうが

こほん、と咳払いをして彼女は僕から目を逸らせた。わかつているだろうが、という一言が僕を震え上がらせる。やっぱり、どこかで恨みでも買つてしまっていたのだろうか。

「あ、あの……ぼ、僕は……」

「いい、何も言うな

最早、弁解も謝罪も許されないらしい。せめて、自分が何をしてしまったのかぐらい知りたかったのだが。

また一步、彼女が距離を詰める。僕は思わず一步下がる。すると彼女は不機嫌そうに僕を一瞥して、「動くな」と苛立つよつに言った。発言権に続いて行動権をも奪われてしまったらしい。

「これでも緊張している。楠木……君も我慢して欲しい

はい、と答えようと思ったが、喋ってはいけないことを思い出して、頷くだけにとどめた。動いてもいけないのだが、これくらいは許してもらえたようだ。彼女は満足げに頷いて、さらに近づいてきた。とうとう、その距離は2メートルをきつた。額からは冷え切った汗が流れ、膝がかすかに震えている。たとえ殴られようと相手は女の子

そんなふうに考えていたのだが、実際その場面に立たされると、実に甘い憶測だったことがわかつた。

「单刀直入に言うぞ。一回しか言わないからな

拳をぐつと握り、真正面から僕の顔を睨みつけて、不動マコは宣言する。罪状を言い渡すつもりだろうか。スタイルが地でスケバンだけある。方式もそれに則っているのだろう。否、スケバンの方式なんて知らないのだけれど。

それにしててもすごい気合の入りようである。握られた拳は怒りの所為か、わなわなと震え、視線はそれだけで僕という存在を消し去つてしまいそうな氣迫が籠っている。さては僕のしたことを言った

後、即刻ぶちのめす算段をしているのだ。見ると、彼女の顔は真っ赤である。怒りが頂点に達している良い証拠である。仇敵を目前にして敢えて罪を宣告しなければならない、そのもどかしさに怒りを必死で堪えているのだろう。一体僕が何をしでかしてしまったのか、そこが全然わからないが、彼女をここまで怒り狂わせたのは事実なのだ。知らない、では済まされないのである。僕も、覚悟を決めなくてはならない。

大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐く。そして、彼女と同様に、真っ直ぐと相手を見て「わかった」と一言だけ、はつきりと答えた。発言は禁止されているが、これは受け入れられる気がした。

思ったとおり、彼女は何も言わずに、僕と同じように深呼吸をして、こくりと頷いた。そして

「好きだ！！」

台詞を間違えた。

「付き合つてくれないか！？」

また間違えた。怒りすぎて錯乱したのだろうか。僕はどう受け答えしていいのかわからず、ぼうっとするばかりである。

彼女はぎゅっと目を瞑り、身体を小刻みに震わせている。顔どころか、耳まで真っ赤である。やはり、混乱しているのだ。

「あ、あのですね

「な、なんだ？」

「ま、間違えて……ませんか？」

僕だつて覚悟を決めたのだ。このまま終わられても、ちょっと困る。せめて一発でも殴られたほうがすつきりするというものだ。

「わ、私は別に何も間違えていないぞ。正真正銘、楠木総一郎に告白したぞ！」

不動マコは今、なんと言つたか。

楠木惣一郎に、告白したと言つた。

つまりこの僕に、彼女は好きだと、愛の告白をしたというのか。

「もしかして……間違えていたのは、僕ですか？」

「……どこのをどう間違えたかわからないが、そうじゃないのか？」

「どうやら彼女も、この僕の態度には意表を突かれたらしい。といふか、僕も意表を突かれた。考えてみれば、彼女の仕草はどこも告白としておかしいものではなかつた。

怒りにではなく、田の前に想い人をしたことにより頬を赤らめていたのなら。

告白する勇気を搾り出すために、拳を握っていたのなら。来てくれて嬉しいと言つたのは、素直な、額面どおりの意味であつたのなら。

鋭い眼光は、睨んでいたのではなく、単純に吊り目だつたとしたら。台詞を間違えたのでなければ。

「…………」「…………」

おそらく一人ともが予期せぬ展開に、沈黙が辺りを支配した。まさか、不良少女として有名な女の子が、体育館裏に呼び出して告白するとは思わないだろうし、彼女にしてみれば、想い人がオトシマエをつけられると勘違いしようなどと、夢にも思わなかつたのだろう。冗談のような話ではあるが、ありえない話ではない。

「ま、まあ……間違いは、誰にでもある」

僕より先に現状を把握できたらしい不動マコが、少し疲れたように呟いた。

「それよりもだな、その……返事が聞きたいのだが」「え、あ、は、はい……返事、ですよね」

告白されたのだった。返事をしなくては。

しかし、頭が追いつかない。告白されたことなんて一度もないし、ましてや女の子と付き合つたことなんてあるはずがない。順当に地味な男街道を歩いてきたのが僕である。好きと言われて嬉しくないはずはない。それは、確かに田の前にいるのは悪名高いスケバンではあるが、実際に会つて、話をしてみると、普通の女の子だ。否、むしろ顔を真っ赤にして告白するなんて、可愛いらしさとさえ感じ

る。

「か、覚悟はできているが。いやならいやと、まつきり言つてくれ
！」

「い、いや……」「…」

「あああっ、違います！…そういう意味じゃないです！…」
ものすごいショックを受けた顔をされて、思わず僕は必死になつ
て弁解した。彼女はすぐに立ち直つたらしく、「紛らわしい！」と
喚くように言つた。確かに今のは紛らわしかつた。

「そ、そのですね。わからないんですよ。なんで不動さんが僕に…」

「好きだからに決まつてゐるだろつ！…」

再び顔を真つ赤にして彼女は怒鳴る。さっきまでは、あんなに怖
かつた彼女の視線が、今では可愛らしく感じてしまうから不思議だ。
でも、今度は彼女が意味を勘違いしたようだ。

「いえ、なんでその……僕を好きに？」

「あ、ああ。それは……その、なんというか。あるだろつ、気がつ
けば……その、好きになつっていたというヤツだ。去年、楠木が…
いや、楠木君が

「楠木でいいですよ」

「あ、ああ。楠木は去年、よくウチのクラスに来ただろつ。友達に
会いに」

そう言われてみれば、確かに中学時代から付き合ひのある高木に
会いに、昼休みなどに遊びに行つっていたような記憶がある。

「そのときになだな、偶然……笑つてゐる顔を見たのだ。それで…
「わ、笑つてゐる顔、ですか？」

「も、文句があるかつ！…？」

よほど恥ずかしいのだろう。ふいつと顔を横に向けて彼女は黙つ
てしまつた。

けど、まあ笑つてゐる顔というのはわかる気がする。笑顔を見る

と、誰だって良い気分になるものだ。何気ない仕草に心が奪われたことは、僕にも経験がある。

「と、兎に角。返事を……早く聞かせてくれ。心臓が爆発でもしそうだ」「は、はい。わかりました」

本当に不動マコは今にも倒れそうだ。見た目とは裏腹に、内心はけつこうナイスに出来ているらしい。そんなところも含めて、可愛いと思う。だから、

「えっと……僕は、今まで、不動さんのこと、怖い人だなって思つてました。やつ今まで、本当に怯えてました。けど、実際に話をしたら、可愛いなあって……す、好きとか、そういう感情はまだないんですけど、それでもよければ、付き合ってくれませんか？」

僕は、正直に言つた。最後のところが、僕から告白したような感じになつてしまつたが、そんなことは気にしない。兎に角、本音を言つたのだ。

「わ、私でいいのか！？」

突然、不動マコは僕の肩を掴んで訴えるように質問してきた。

「え、ええ。不動さんがいいです」

ちょっとびびつたけど、努めて冷静に受け答えをする。

「この格好でもいいのか！？」

「不動さん、その格好けつこう似合つてますよ？」

「え……そ、そうかな……つじゃなくて、おかしいと思わないか！？」

「そりゃ変わつてますけど、別に規則破つてないですし、好きならいいと思いますって」

「……田もキツイし、背も高すぎるのは……それでもいいんだな？」「綺麗な田ですし、すらりとしててとってもいいです。全く問題ないですよ。可愛いですよ」

一体、彼女は付き合つてほしいのか、断つてほしいのか。だんだん判らなくなってきた。

彼女を見る。間近にある顔は、今までのようないい光は宿つていなかつた。その代わりに、瞳いつぱいに涙がたまつていた。

「つ……楠木い！」

「ぐあつ！？」

いきなり、不動マコが体当たり。否、抱きついてきた。僕の胸に顔をうずめて、堰を切つたように泣き出した。かなり強烈だったが、なんとか踏ん張つて、彼女の背中を、軽く撫でてやつた。

思うに、不動マコはずつと自分に自信が持てなかつたのではないかだろうか。

スケバンスタイルという、その格好の所為で、人が近づきたくになつてしまつたのだろう。人が自分を避ける姿を見てゆくうちに、自分という存在に自信が持てなくなつた。そんな気がする。

「不動さん」

ようやく落ち着いた不動マコに、ゆっくりと話しかける。

「……マコ」

「……？」

「マコって呼んでほしい」

恥ずかしそうに、顔をうずめたまま彼女は呟いた。いきなり、ドクンと僕の心臓が胸打つた。彼女の仕草が、どうじみつもなく可愛く感じた。

「……わかりました」

「あと、敬語もいや

「……わかつた。それでさ、マコ、変なこと聞くんだけど、なんでもその、スカートとか、そんなに長くしてるの？」「ずっと疑問だつたことを聞いてみる。

「趣味だ」

「趣味ですか」

「駄目？」

「いや、いいんじゃないかな」

あんまりにも単純な理由に、脱力する。どうやら、この不動マコ
というのは、周りからのイメージとは全く違う方向で変な人らしい。
「自分に一番似合うのは、」いつのだと思つてな
「ま、まあ似合つてるけど」

確かに怖いぐらいに似合つている。けど、その所為で人から遠巻
きにされているわけだから、いい似合い方ではない。

「不満か？」

マコはちょっと悲しそうな顔で僕を見た。

「不満というか、勿体ないかな」

「勿体ない？」

「マコは多分、普通の格好でも全然似合つと思つよ」
背も高ければ顔もいい。むしろ似合わないもののほうが少ないの
ではないだろうか。

「色々、教えてくれ。楠木だけが頼りだ……」

「う、うん。まあ、できる範囲でね」

まあ、世間知らずは追々直していくばいいだろ。

「じゃ、じゃあ早速服を見繕つてくれ！」

「え、今から？それに僕はあまりそういうのは得意じゃ……」

「何を言つてゐる。楠木が一番似合うと思つた服が一番に決まって
いる」

……こういうこと、言われるとけっこう照れてしまう。

「……じゃあ、こいつか」

「うん」

マコは額くと、ゆっくりと身体を離して、ちょっと照れくわそう
に微笑んだ。成る程、確かに笑顔といつのは、人を魅せる。

「……手、繋ごうか」

笑つて、僕は言つた。するとマコは、心底嬉しそうにこうつと笑
つて言つた。

「うん、繋ぎたい」

いづして僕達は体育館の裏を後にした。

仲良く手を繋いだ、一つの長い影法師をその場所に残して。

(後書き)

拙作を読んで頂き、ありがとうございました。
本作は、数年前に執筆して、最近加筆修正したモノです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9504b/>

かわいいひと

2010年10月8日14時25分発行